



創立 1995 年 10 月 18 日

気軽に交流を楽しむクラブ

2013~14年度 テーマ ー優れた運営の仕組みを継承し、会員活動をより楽しくしようー

第 214 回例会

日 時：平成 25 年 8 月 8 日(木) 12:30~14:00

場 所：八王子エルシィ

出席者：66 名 欠席者 6 名 出席率 91.7%

(会員総数 72 名 休会 0 名)

会食とハッピーコイン披露

戸田例会委員長の合図で会食を始め、会食中に荒会長より 15 件のハッピーコインの披露があった(8 ページに掲載)。

開会 戸田例会委員長の司会で開会

本日の配布資料の確認

1. 挨拶 荒会長



皆さん、こんにちは。八王子の夏祭りも終わりましたが、まだまだ暑い日々が続いています。8 月例会に、元気な姿で出席頂き、ご同慶の至りです。

本日は、当クラブの生みの親にあたる、東京八王子南ロータリークラブ(RC)から、中島会長と小澤幹事にご出席いただいております、また年度初めの助成金を頂戴致しました。ありがとうございます。

新年度も 1 か月を経過して、各委員会の活動も軌道に乗ってきたところだと思います。各委員会の活動に敬意を表するとともに、その成果を楽しみにしています。

新年度の対外活動もスタートしています。先ず八王子「宇宙の学校」関連では、開校式と第 1 回スクーリングが 7 月に行われました。具体的な内容については、後に下山運営本部長からお話があります。

次に、近隣の 3PC(多摩、日野、八王子)の連絡会議が 7 月 29 日に行われました。本件も後に

浅川交流担当理事からお話があります。

さて、7 月例会で披露しました「今年のテーマ」の内、“八王子「宇宙の学校」に関する当クラブ内の組織・機能について研究する”件、及び“20 周年記念事業の企画会議の発足”の件については、8 月の理事会で議論しました結果、来年度に関わることであり、土井副会長をヘッドとする検討会を立ち上げて推進することになりました。

会員の皆様には、副会長からの意見聴取等へのご協力をお願いします。

早いもので、昨日は“立秋”でした。今年は梅雨明けが早かったことと、長期予報では残暑もまだまだ厳しいとのことですので、会員の皆様には健康に留意して、今年の長い夏を元気に乗り切って頂きたいと思います。

2. お客様の紹介とご挨拶

東京八王子南ロータリー(RC)会長・中島郁夫様と幹事・小澤晴美様。



中島会長のご挨拶

私も小澤も共に八王子生まれの八王子育ちです。今日こちらに寄せて頂くと大変な盛況で、すごい老人パワーが漲っていると感じました。いつも多岐に亘る優れた活動されていることに敬意を表します。プロバスクラブは南RCの創立 10 周年の記念事業として立ち上げたのですが、それから 18 年経って今や我々の活動よりずっと優れた、地域に密着した立派な活動をしておられます。従って、申し上げたような資格でお付き合いするより、今や友好クラブとして付き合い頂いた方が気が楽だと思っています。わがクラブには嘗てプロバスクラブ担当委員というのがありまして、私もそのメンバーの一人でした。今はもうありません

が、当時、合同例会を開いた経験があります。それほど懇意にしていた、そして友好的関係を持ったクラブだと私は認識しています。これからもこういった事も、或いは例会でなくても社会経験の豊かな知恵者にうちのクラブに来ていただき、お話を聞く機会があってもいいのではないかと思います。

私の、こちらのクラブとの個人的な関係といいますと、高校の同級生が大勢います。平原元会長、長町元会長、北原満夫、石井實元会長、皆今はこのクラブにはいなくなりました。残念です。矢崎さんも同期です。往時、宮崎さんから、RCを辞めてプロバスへ来いよ、と誘われた事もありましたけれど、来たら平原さんなどに引っ張られていたかもしれないので、来なくてよかったと思います。いづれにしても、今後のプロバスクラブの御発展を祈念してご挨拶いたします。

3. パースデーカード贈呈



今月も池田会員手作りのパースデーカードが、荒会長より下記8名の会員に贈られた（敬称略・写真左から）大高、阿部和也、久野、佐々木正、荒会長、宮崎、八木、竹内、（欠席）山下。

4. 卓話 私の戦争体験（3人・15分/1人）

(1) 土井俊玄



私は1935年10月15日生まれ。終戦は1945年8月15日ですから、満9歳と10か月。9歳の少年は全く責任感がなくて、ただボーとしていたと思います。当時、私の父は前年の昭和19年、30歳で横須賀の海軍鎮守府に居りました。私自身は兵隊に行ったわけではなく、終戦前後の少年時代の思い出をお話しします。

小学校3年の頃から、集団登校をやりました。班を組んで校門に近づくと、班長が“歩調をとれっ”と号令をかけサッサッサッと足音高く門を通る。入ると左奥に奉安殿があり、天皇陛下の写真が飾ってあり、そこで“左向け左”の号令で奉安

殿に向かい最敬礼をするのです。

3年～5年の頃は、学校へ行くと直ぐに「警戒警報」のサイレンが鳴る。すると生徒全員を家に帰す、帰ったと思うと「警戒警報解除」となり、学校へ戻る。

また、時には校庭に落ちている錆びた釘を拾う。鉄くずの回収の一環です。

家庭はどうであったかという、食料が極度に不足し、どうしようもなかった。母親が横須賀の父親の所へ行って留守になった時、甘いものが欲しくて砂糖の入れ物の蓋をそっと開け、弟と二人で舐め始め止まらなくなりお腹が変になったこともある。食料は不足し配給制度で、手帳を持って配給所へお米を取りに行ったりしました。

昭和20年8月2日の未明、八王子大空襲があった。2週間早く降伏してくれていたなら、と思う。空襲の時どこにいたかという、防空壕の中。お墓の一部が畑になっていて、真ん中に太い栗の木が三本生えていたのだが、防空壕はその根元辺りに造ってあった。夜中に空襲警報が鳴ったが、一旦解除になったので寝てしまった。二度目の空襲警報が鳴り慌てて起こされ、周りを見たら黄色い煙が充満していて急いで防空壕に入りました。この時、母親というのはすごいと思った。母親は、直径60センチ、高さ80センチ位の米櫃に、お米はたいして入ってはいなかったが、その中にいろいろなものを詰め込んで、火事場の馬鹿力で担ぎ出した。私どもはお寺なので、父から厳しく言いつけられていたと見えて本堂からご本尊と過去帳を持ち出しました。お蔭で今から420年前の文禄年間の過去帳が今でも残っている。空襲の最中、好奇心から外を見ようと思ひ防空壕から顔を出したら、その瞬間、直ぐ近くに焼夷弾が落ち、青白い火の玉が私の頭にかかってきたので、急いで中に入った。防空壕といっても、柔な作りで、真ん中に梁が一本あって、そこへ薄板を載せ、土をかけただけだから、直撃を受けた所では何人も犠牲になっている。町では防空壕がないので、逃げ歩いた人がかなり直撃を受けている。友人の2歳年上の6年生の姉が直撃を肩に受け、即死せず、父親に抱かれて痛い、痛いと言きながら、息を引き取ったそうです。

焼け出された後、お墓の中の畑に、焼け残ったトタンを何枚か持ってきて、母親が持ち出した布団があったのでこれを敷き、青空や星を見ながら何日か寝ました。雨が降るともうダメ。不思議なことに道路一本隣に焼け残った家が何軒かあってその中の一軒はかなり広がったので一晩泊めてもらいました。その次の晩はまた雨が降ってきたので、焼け残った知り合いのお寺に泊めてもらいました。恥ずかしいことにその晩私はおネショしてしまっただけを記憶しています。

焼け出された後、終戦になる前に父親が、様子を見て来い、と上司に言われ、休暇をとって駆けつけてきました。丸太を何本か貰ってきて、焼け残った本堂のトタン屋根を持ってきて屋根と壁にし、掘立小屋を作り、屋根には風で飛ばされないように石を載せ、このバラックに何年か住みました。

そのような時に、配給があるというので、味噌屋さんへ行きました。家は焼かれて存在しないが、味噌樽が焼け残っていて、味噌を焼け残った鍋に入れ持ち帰りました。味噌汁は作れず、キュウリに味噌をつけて食べたのだが、とても美味しかったのを覚えています。

まだまだ多くの思い出がありますが、これで終わりにします。ご清聴ありがとうございました。



(2)馬場征彦

はじめに：私は戦争体験を語れる最後の世代だとは思いますが、皆様にお話して感動を呼んだり共感を得るような「思い」とか「辛さ」等は、

実感としては持っていません。

従って、以下は台湾の日本人社会で終戦を迎え、引揚者として内地に帰還した国民学校 1 年生の戦争体験記として、お聞き頂ければ幸いです。

終戦の日： 昭和 20 年 8 月 15 日、私は 6 歳で国民学校 1 年生でした。家族は 33 歳の母、3 歳の妹の 3 人で、当時の日本国・台北州台北市の中心部から南西約 30 km にある土城（現台北市土城区）に疎開していました。（なお、銀行員であった 36 歳の父は、日本軍が昭和 17 年 3 月に

占領した直後のジャワへ軍属として派遣されていました）。

この日は晴れており、何処かへ行っていた母達大人が、泣きながら帰ってきたのを覚えています。学校などに集められて、“玉音放送”を聞いてきたのだと思います。（ネットによると“玉音放送”は短波放送で台湾等の外地にも同時放送されたそうです）。

疎開前： 疎開前は台北市の松山空港の近くに住んでいました。台湾の空襲は、台湾沖航空戦（昭和 19 年 10 月 12 日～16 日）から始まったそうですが、空港に近いためでしょう何度か空襲を経験しました。防空演習（“警戒警報発令！”、“空襲警報！”や“退避！”などの号令、防空頭巾をかぶって目と耳を手で押さえて地面に伏せる訓練などの記憶あり）、灯火管制や防空壕に入ったこと、空港に一本近い道路沿いの家に爆弾が命中した時のもの凄い揺れの記憶があります。更に、夜の公園で見た「轟沈」とかいう映画（日本の潜水艦が魚雷で敵艦を沈める戦意高揚映画）、夜間に高空を飛ぶ多分偵察機を数条の探照灯で追跡しながら高射砲を撃っていたこと、また中心街へつながる道路沿いに覆いを掛けられた数機の戦闘機が隠されていたことなどを覚えています。

疎開： 台湾沖航空戦（台湾全域の基地航空機がほぼ壊滅した。）後の昭和 19 年末頃、松山空港近辺は危ないということで台北市郊外の土城に疎開したのでしょう。土城と台北市内との交通は途中の板橋駅からは人力トラックでした。近くには国民学校や医院もあるが、裏の小さな丘にはバナナが生えるような土地に急造のバラックがあり、約 40 世帯と共に 1 年弱暮らしました。ここで国民学校に入学しましたが記憶は微かです。

台北大空襲（昭和 20 年 5 月 31 日）の時は、真昼間に B-24 と B-29 の 61 機編隊が、台北市上空を 4 周し爆撃するのを裏の丘から遠望していました。キラキラ光り低空で飛ぶ B-24 や B-29 が臉に残っています。（延べ 244 機の来襲と聞いていましたが、ネットで調べた内容 {フィリピンから計 117 機の B-24 による波状攻撃} とは一致せず）。

疎開前も含めて、台北市内の繁華街・西門町に

ある大叔父（父方の祖母の弟）の家に一家でよく遊びに行きましたが、娘が5人もいたせいかな軍人がよく来ており、多くの軍歌を覚えました。中には“台湾沖航空戦の歌”らしきものがあり、今でも2番まで唄えます。（歌詞には“台湾東洋上、時10月12日”、“出て来いニミツツ、マッカーサー”、などがありますが、引揚げ後は人前では歌っていません）。

太平洋戦争で米国は、南方から島伝いに反攻する戦略だったそうですが、フィリピン奪還後の次の目標だった台湾は、先を急ぐためにスキップした由であり、幸いにも台湾の戦禍拡大はありませんでした。

終戦後：疎開地は物騒でしたが、疎開前の家は空襲被害で戻れず、結局大叔父の家に移り、2学期からは近くの国民学校に入りました。国民学校の1年でも、先生が右前方入口から入室する時には級長が“かしら右”と言い、礼をするときは“かしら中、礼”と号令していた記憶があります。また、この国民学校では“サンミンカ”（中華民国の国歌“三民主義の歌”らしい）を、訳も分からないまま原語で歌わされていました。

台北市内では台湾人達が戦勝国としてのお祭り騒ぎをしており、高い下駄を履いた仮装姿で練り歩いている光景を何度か見かけました。しかし日本人に危害を加えることはなく、大叔父の子ども達とよく町にでかけ、バナナ入りミルクセーキや小豆あんこ等の甘いもの店などに行きました。大人達と揃って、淡水河近くの台湾屋台が集まっている所（大稻埕＝だいどうてい）へ行った事も何回かありました。

空襲被害は軍の施設や官庁街が大きかったそうですが、台湾総督府が半壊しているのを見かけたこと、淡水河の橋に穴が開いていた事ぐらいしか記憶にありません。

引揚げ：昭和21年3月3日頃、私達親子3人は基隆から“駆逐艦”に乗り時化の東シナ海を2日間航海して、鹿児島（加治木港らしい）に上陸しました。途中ハッチから大量の海水が入って床が水浸しとなり、母の草履が流された事や、船酔いがひどく食事が出来なかった記憶が鮮明です。鹿児島入港後はDDTをたっぷりかけられ、

学校らしき所に何日か泊まりました。ついで列車に乗って関門トンネル（昭和19年9月上り開通）を通過して広島県の尾道で下車して泊まり、翌日の船で今治に渡って予讃線（昭和20年6月に宇和島まで開通）で父母の故郷である愛媛県宇和島市に到着しました。

その日（3月13日頃）も晴れており、駅から自転車の人力タクシーで母の実家に向かいました。所が着いた実家は焼けて土台しかない有様で、母は茫然としていました。（片田舎の宇和島ですが終戦前に予科練が作られたので、大きな爆撃を受けました）。丁度近くに住む母の義兄が通りかかり、ようやく母の実家にたどり着いたのでした。

母は昭和12年に父と結婚して未知の台湾に渡ったのですが、子ども2人を連れて気丈に引揚げたことに感心しています。勝手な推測ですが、引揚げ援護システムが有効に機能し、かつ高砂丸で2回里帰りした母の経験も役立ったのでしょうか。

記憶によれば、引揚げ者は一人当たり行李1個と現金1,000円しか持ち帰ることができず、預貯金は後になっても封鎖されたままでした。行李は別送で届きましたが、中に入れていた“砂糖と羊糞”はどこかで抜き取られており、母が大いに嘆いていました。

4月からは国民学校の2年生になりましたが、私には教科書がなく、母が近所の同学年の子の家から借りて、書き写してくれました。

5月には父が復員して家族が揃い、8月には爆風で半壊した家を修理して移り、貧しくも親子水入らずの生活に戻りました。そして翌年には弟が生まれたのでした。

以上で、私の戦争体験を終わります。



(3)河合和郎

俳句の世界では、8月の扱いは「終戦日」とか「敗戦日」という季語になっています。又、広島・長崎の原爆も「原爆忌」とか「長崎忌」という季語として使われています。このような季語を使って多くの俳句が作られていることは、未だに戦争の記憶が生々しく残っていると感じます。

私の生まれは昭和 12 年 1 月 21 日。生まれた年の 7 月 11 日に日中戦争が始まり、昭和 16 年 12 月には大東亜戦争の開戦、そして昭和 20 年 8 月 15 日の終戦までの 8 年間は“戦時下”そのものでした。

戦時体制の中で、人が消え、物が身の回りから姿を消していきました。町中の鉄材や寺の鐘までが強制的に回収され、戦争遂行の為に、個人生活の隅々から金属類が回収された。当時の回覧を見ると「根こそぎ回収」と書いてあります。我が家の鉄の門扉も回収。工場の機織り機も回収。子供の学生服の金属製のボタンも回収され代わりにガラスのボタンが配られました。又、ある日、小学校の先生から櫨の苗木が配られ「これを家にもって帰り庭に植えなさい。将来、軍艦の材料になるから大事に育てなさい」と言われ、持ち帰り父に手伝ってもらって植えました。小さな子供心にも、なんだかおかしいなと感じました。

更に戦後の混乱、青春時代を含めて殆どが戦争の影響の中で育ってきたので、戦争の記憶は子供心にかなり生々しいものがあります。

昭和 20 年 8 月 2 日未明、八王子は B29 による焼夷弾攻撃を受けました。158 機の B29 から焼夷弾 1,600 トン・8,000 個もの集中攻撃。町の大半を消失、死者 367 人、焼失家屋 15,300 戸もの被害。終戦が 8 月 15 日ですから、わずか 13 日前の大空襲でした。私の家が浅川の北の高台にあり、そこから震えながら見ていました。多くの人が浅川を渡って山の方へ逃げてこられました。八王子の空襲の場合は、1 週間ほど前に予告がありました。“空襲があるから逃げろ”、というチラシが撒かれ、1 万人以上の人々が逃げ、比較的被害が少なかったのです。予告があったので、東京方面から 50 台の消防自動車と消防士 300 人が配備されました。しかし結果として殆ど役に立ちませんでした。というのも、攻撃が始まって 15 分ほどで変電所が直撃でやられて、ポンプが使えなくなり配水地の水を使い切った時点で活動できなくなったからです。空襲の数日後、町に出たのですが町はまだ熱く、遮蔽物が一切なくなり遠くの山が近くに見え、甲州街道には焼け焦げた消防車が何台も残っていました。

この空襲で私の家は焼かれなかったのですが、母方の実家が焼かれ、家族が一緒になったので、私の家族は相模原に引っ越し、その後約 20 年八王子を離れていました。

戦後の食糧難は酷いもので、隣の部屋で父親と母親が話しているのを聞いた覚えがあります。「お父さん、明日子供たちに食べさせるものがないにもない」と母親が言い、それを聞いた父親は黙って家を出ていったまでは覚えています。翌朝何が食べられたかは覚えていません。このような状況ですから、子供心に畑にあるものが魅力的に映るので、茄子、胡瓜、芋まで掘って生のままで食べました。そのようにして飢えを凌いで今があります。「ひもじさ」を知らない今の飽食の時代の若者には理解しがたい現実だと思います。

相模原には造兵廠と整備学校の工場があり、金網で囲まれた広大な施設でした。終戦後、そこへ進駐軍が入ってきました。金網越しに物のやり取りをするのですが、米兵がお菓子とかキャンデーを投げてよこす、それを子供たちが争って拾うのですが、私にはどうしても拾えませんでした。

以上、とりとめのない戦争の話をしました。戦後 68 年が経ち、最近、なにか空気がおかしくなっている感じがしています。「いつか来た道へは絶対に戻ってはならない」という思いを強くしています。そして日本の将来の姿をあらためて考えていきたいと思います。

5. 幹事報告 馬場幹事

今月は理事会関連の報告のみです。

(1) 7 月例会における挨拶などで、荒会長から提起されておりました次の 3 件の課題については、土井副会長を主査とする検討会において検討を進めることになりました。

1) 次年度以降の“地域奉仕委員会”の負荷軽減策の検討

2) 次年度以降の「宇宙の学校」関連組織の検討

3) 20 周年事業の企画会議の立ち上げ
会員の皆様におかれましては、土井副会長から問い合わせや照会などがありましたら、ご協力をお願いいたします。

(2) 会員バッジの追加手配の承認と発注の件

当クラブのバッジの在庫が 16 個になったこと、同じバッジを使用している“埼玉浮き城 PC”及び“東京日野 PC”から各 20 個の注文依頼を受けたこともあり、当クラブ用 20 個を加えて計 60 個のバッジを発注することを提案し承認されました。本件に関しては澤渡会員に見積もり作業を含めて支援して頂き、8 月 5 日に前回と同じ“大王メタル”に発注しました。当クラブ向け 20 個の費用 15,400 円は予備費から支出します。

(3) 当クラブ運営上の規定・規範および参考書類をリストアップし、必要なら見直しをして保存管理し、会員に周知して行くことを決めました。

(4) 新年会の講話の件

竹内副幹事から、新年会の講話の候補として“社会インフラの維持管理”(仮題)の提案があり、これで進めることが承認されました。

6. 委員会報告

(1) 例会委員会 戸田委員長

会員総数 72 名 出席数 66 名 欠席 6 名
出席率 91.7%

(2) 情報委員会 田中委員長

・岡田事務局長の印刷所が水害で印刷不能が心配されたが復旧し、無事プロバスだより 213 号が発行出来た。米林会員の甲子園の思い出が、また、土井副会長の千人同心・興岳寺にまつわる話が掲載されている。

・投稿の在庫が不足しているので、こぞってお出してください。「つぶやき」も復活させたい。

・新しいホームページが完成したのでご覧いただきたい。プロバスだよりのバックナンバー全てが掲載されていますのでご活用ください。

(3) 会員委員会 荻島委員長



会員名簿の 3 ページ目が改定されたので差し替えて下さい。

(4) 研修委員会 河合委員長



1) 野外研修：

野外研修の日程に関するアンケートの結果です。出席者 69 名中 62 名の方から回答を頂いた。

回収率 90%。内訳は、①日帰り

②一泊二日③どちらでもよい、の設問に対し①23 名 (37%) ②13 名 (20%) ③26 名 (42%) でした。①+③は 49 名で約 80%、②+③は 39 名で約 60%です。この数字から得た結論は、日帰りの希望が多数。一泊二日にもご意見を頂いているので、これからの課題として検討していきたい。日帰りが決定したので、現在、目的地について選定中。9 月の例会で具体的な案内を出し募集して、11 月 14 日に実施します。

2) 卓話：

本日は 3 人をお願いしましたが、これからもこの形も採用したい。お話によってはじっくりという場合にはそのようにします。来月 9 月には渋谷会員に現代の世相を斬る、という視点からお話しを頂く予定です。

3) 出前講座：

現在、1~2 件の申し込みがあり、今後とも皆さんのご協力を頂きたいと思います。

(5) 地域奉仕委員会 内山委員長



前回、生涯学習サロンのアンケートをお願いしましたが今日が締切日ですので、お出してください。

一般サロン会員のアンケートの取り纏めをしました。これについては前委員長の橋本会員から説明して頂きます。

橋本前委員長：

4 月の理事会で、初の試みとして一般会員からアンケートをとることになり、サロンの抄録を一般会員に送付するとき、用紙を返信用封筒と共に送りました。サロンに参加した理由を聞く設問には、「サロンのテーマ」と答えた人 38%、「開講式・閉講式の特別講話」とした人 34%。「今までに参加して興味を持てたから」32%、「友人、知人に誘われて」28%の順。次に参加回数については、初参加の方の回答割合が高い。「サロンはどこで知りましたか」に対して「送付されたお誘いを見て」が 44%、「プロバス会員に誘われて」が 40%。P C 会員の勧誘活動が有効であることを示す。特に新入会員の勧誘が有効と考える。「今年の学習サロンの内容について伺います」の設問には、5 段階評価 (プラス 2、プラス 1、普通、マイナス 1、マイナス 2) で評価してもらった。い

ろいろな評価を頂いたが、大雑把にいうと、特別講話は好評。テーマについては、すべてのテーマでプラス。9テーマが+1以上、中でも草笛禅師、絵手紙、内視鏡は好評。運営上配慮すべき問題やクレームも書き込まれており、今後の参考にした。野外サロンは好評で、感想の書き込みも好意的。「これから聞きたい話し手の分野や興味を持ったテーマ」は複数回答で、「歴史」55%、「医療」47%、「芸術」47%、「旅行」38%、「社会問題」34%、などとなっている。また、次年度も参加したい、友人に「お誘い資料」を送付してほしい等の記載も相当数ありました。

このアンケートの結果、一般会員が増えていくのではと思っています。

(6) 交流担当 浅川理事



先月末、3クラブ交流委員会を開き、多摩と日野では担当が変わったので、新旧そろって出席してもらいました。前年度は、卓話と同好会が順調にスタートしまし

た。特に同好会の方では大きな進展がありました。今後ほかの同好会にも広がるのではと期待しています。そのほかに、各クラブの行事に参加する話もありまして各クラブの年間スケジュール表を交換しています。例会への参加もあまりされていないので、今後、誰でも気軽に参加できることを考えていこうということで、これを何とか進めて行こうと思います。プロバスだよりは現在交換し合っていますが、ホームページ上で出来るようになってきているので、わざわざ印刷物の交換をしなくても済むのではということで、今後この方向で進むことにしています。又、打ち合わせも、去年は2か月に1回打ち合わせをしていましたが、今は4か月に1回にしています。これもメール会議がメインになると思います。どなたか他のPCの例会に出席したい希望があれば、私に連絡してください。そちらへの連絡は私の方でやります。

7. 「宇宙の学校」報告



下山運営本部長

(1) 7月13日(土)北高校会場
14日(日)本部会場(教育センター)で開校しました。詳しくはプ

ロバス日より第213号をご覧ください。

(2) 7月17日(水)に、JAXA(宇宙航空研究開発機構)宇宙教育センターの指導による、宇宙教育指導者育成セミナーを開催しました。「宇宙の学校」スタッフの方から、下記の21名が受講し、指導者セミナー修了証を貰いました。この方々は、「宇宙の学校」の先生をする資格があるわけです。実際はまだ経験不足ですが実際にやっていく日も近いと思います。

有泉裕子、市川昌平、岩島寛、岡本宝蔵、荻島靖久、下田泰造、下山邦夫、高橋敏夫、高取和郎、武田洋一郎、田中信昭、田中美代子、寺田昌章、土井俊雄、永井昌平、野口浩平、馬場征彦、宮城安子、矢崎安弘、山口三郎、吉田信夫。

(3) 7月28日(日)に「宇宙の学校」5周年記念事業の一つとして、国分寺で公開記念講演と、オープンディスカッション、特別スクーリングがありました。的川先生のお話と、ディスカッションは実際のボランティアの方の経験の話でした。八王子の経験も少し報告しました。特別スクーリングは熱気球でした。国分寺で参加の子どもの気球と、全国各地で作った気球を一斉に打ち上げました。八王子北高校で作ったばかりの気球も加わりました。今回は8月25日(日)相模原であります。9時にJAXAに集合して見学、午後は特別スクーリングです。

(4) 次回の学校は9月7日(土)本部会場(教育センター)12時30分開始。14日(土)北高校会場で、13時30分開始です。

(5) 「宇宙の学校」で何時もお世話になっている子ども科学館サイエンスドームの呼称が、コニカミノルタサイエンスドームとなりました。

8. 同好会報告

(1) ゴルフ同好会：米林会員

多摩地区の合同コンペ第1回目をこの5月に開きましたが、第2回目を10月24日に、同じ相武



カントリーで開催します。前回は合計21名(八王子8名、日野9名、多摩4名)でしたが、第2回目は人数を増やしたいと思います。参加したい方は、私まで申し出て下さい。締め切りは10月の頭です。

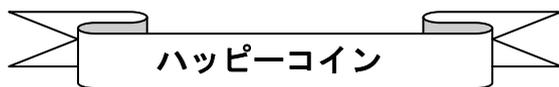
(2)お茶、歴史、写真、囲碁、麻雀クラブ、美術鑑賞、俳句、旅行の各会:報告なし

9. その他 なし

10. プロバスソング斉唱

11. 閉会の挨拶 土井俊玄副会長

皆さん、お疲れ様でした。先ほどの終戦にまつわる話の中で不思議に思ったことがあります。戦時中は学校の先生から戦っている相手を鬼畜米英だと盛んに吹き込まれました。米軍が進駐してきたとき、アメリカ側は、相当な抵抗があるのではと心配し、覚悟しながら占領に入ったそうです。私が見る限りアメリカ兵が入ってきたとき何の抵抗もなかったのです。例えば、フランスがナチスドイツに占領された時には、レジスタンスの抵抗があり、ヨーロッパ各地でも抵抗があった。日本は、いつまでも恨みを残さないというか、すぐに許せるという選択があるのかと思ったりします。まだ日本人はこうなんだとはっきりしたものは解りませんが、どなたかこのような話し合いが出来たらと考えています。



◆腰痛以外は体調もやっと安定して来ました。出席不良おゆるしてください。今後も宜しくお願いします。 石田雅巳

◆お蔭さまで健康で傘寿を迎えることが出来ました。沢山の方々に支えられて生かされていることに感謝いたします。 大高秀夫

◆首のデキモノを手術しました。幸い両性でした。もう少し元気で居たいですからね。 立川富美代

◆“サヨナラ”と逝ってしまったアノ人一碗のお茶ただ上げるのみ。お盆の日を迎えて。 古川純香

◆「宇宙の学校」今年も7月に好調のスタートをしました。今年も成功するように！ 下山邦夫

◆喜寿を迎えて。8月17日、77歳の誕生日を迎えることが出来ます。未知の新しい良き年でありますよう祈念致します。 宮崎浩平

◆8月1日から5日まで八王子平和展、無事終わりました。語り部や展示物説明など。皆様ご協力有難うございました。 広瀬智子

◆ハッピーを目指してハッピーなスタートが出

来ました。 荒正勝

◆昨日8月7日、私は60歳代から70歳代の半ばの69歳を迎えました。「六十・七十は鼻たれ小僧…」(平櫛田中筆)。日々、健康で「書道」に精進してまいります。 阿部和也

◆ぼけない麻雀会において1年ぶりに優勝。2度目の3連勝なるか。乞うご期待。 東山栄

◆先の日曜日、大学の研究室の同期の仲間と大井川鉄道のSLに乗って来ました。暑かったが昔に帰ってリフレッシュしてきました。 高取和郎

◆8月5日、81回目の誕生日を迎えました。平成27年春、長野新幹線が金沢まで伸びます。一番列車で金沢へ行く予定です。今後の10年・20年先の社会を是非見たいです。 竹内賢治

◆金峰山、みずがき山の麓で初めて溪流釣りをしました。ヤマメが1匹釣れました。ハッピー！ 飯田富美子

◆例会や他クラブとの会合が動き始め、ホッとしています。今後とも皆様のご支援宜しくお願いします。 馬場征彦

◆今朝我が家の小さな庭で空蟬2つ、いつ羽化したのか蟬の声。 野口浩平



千人同心と興岳寺について
(中編)

土井俊玄



さてそれでは千人同心とはどういう人々だったのでしょうか。

千人同心の源は甲斐国にありました。ご存知のように応仁の乱以降、日本国内は群雄割拠、戦国大名の戦乱の時代にあり、下克上の嵐が吹きまくっていました。甲斐国には古くから甲斐源氏の武田氏があり、戦国時代には他の勢力を制圧し、戦国大名として君臨していたのでした。当時の武田氏は家臣の統制法として寄親・寄子制を採用しており、寄親は小人頭ともいわれ、その配下に寄子(小人・同心)と呼ばれる人々が従っていました。そして今は亡き野口正久先生の論文によれば、「横目衆」に属していたのですが、その役割については、目付役として武士同士の間での悪事の取り締まりのようなものではなかったかと考えられま

す。その他の重要な仕事としては、信玄の居館の番役や領国内外を結ぶ主要道路の警備にあたるのが任務であり、いわゆる九口筋と云われる甲州に出入りする九つの道筋奉行として軍事的守備体制の一環を担っていたのでした。「横目衆」に属していると同時に鑓奉行にも属し、戦時には長柄の鑓を携えて出陣し、九口を固め防衛する重要な役割を任じていました。寄親としての小人頭には何人の寄子が従っていたのか、野口先生の論文では、一人の頭に20人から40人ほどの小人が従っていたとあり、2003年に八王子市郷土資料館編集の「千人の侍たち～八王子千人同心～」によれば、9人の小人頭が各30人ずつの小人（中間）を預かっていたとあります。それでは九口とは、又9人とはどういう人だったのか見ていきます。甲州はその地形的条件から周りは武州・信州・駿州・相州の4カ国に囲まれており、2つの境界に九つの境口が設けられていたのです。東から時計回りを見ていくと、(1)津久井（山本）、(2)山中（志村）、(3)本栖（原）、(4)藤川「富士」（中村）、(5)興津（窪田）、(6)諏訪（河野）、(7)佐久（窪田）、(8)佐久（石坂）、(9)秩父（荻原）の九口です。以上が九口と9人の頭の名前です。9人の頭の名を改めて並べてみると、山本氏、志村氏、原氏、中村氏、窪田氏、河野氏、窪田氏、石坂氏、荻原氏となります。

天正10年（1582年）強大な勢力を誇った武田氏は、信玄が上洛戦の途上で病没し、子息勝頼は父信玄に代わり領国の運営に当たりましたが、織田・徳川の連合軍に攻められ、ついに天目山の麓、景德院において非業の最期を遂げ、ここに武田氏は滅亡しました。武田氏に代わり甲斐国に入国したのは徳川家康でした。家康はこれによって5ヶ国（三河、遠江、駿河、甲斐、南信濃）の領主となり、特に新しい領国である甲斐の国の領国経営に力を尽くしました。家康は武田家旧臣をできるだけ登用し、自らの家臣団の中に組み入れることで兵力の増強を図ると同時に旧武田家臣団の心をつかんで行ったのです。

ところが天正18年（1590年）には関東の覇者北条氏は豊臣秀吉に攻められ滅亡しました。その後徳川家康は秀吉の命により、旧領5ヶ国を召し

上げられ、敗戦後の混乱のさなかにある関東を与えられたのです。

家康の関東領国経営の基本方針はいくつかありましたが、その中の1つが山城の廃止でありました。それは滅亡した旧戦国大家の家臣の不穏な動きを少しでも封ずるためでした。八王子城や鉢形城などは家康の入城後すぐに廃城になっています。甲斐の国境警備に当たっていた9人の小人頭と配下の小人・中間（寄子または同心）と共に八王子城下に移住したのは天正18年7月29日のことでした。八王子城落城がその年の6月23日であったことを考えると、極めて迅速だったことに驚かされます。この時9人の頭と一緒に移ってきた小人の数は、はっきりしないものの248名とも250名とも書かれており、また300名と云う記録もあります。ただこの時小人頭が1名増員され10名となりました。小人が500名となったのは「天正19年奥州御陣のみぎり」の時、これは奥州の九戸政美との戦いに参戦した時の事でした。更に1000人となったのは「関ヶ原御陣のみぎり」の事で、戦乱の終止までの大戦争のための兵員の増強の為でありました。（次号へ続く）



虹

永井昌平

梅雨時期にはしとしとと雨が降るのが普通であったが、地球温暖化のせい、ゲリラ豪雨であるとか、爆弾低気圧であるとかぶっさうな気象現象が見られるようになってきた。しかし、雨上がりにはきれいな虹がよく見られる。虹は水滴のプリズム作用によって発生する。水滴が小さいと光の分散角度が広がり、色が重なって「白虹」になる。また、太陽が低い位置にあると赤色光が多く水滴に入るために「赤虹」となる。

人間は虹の色をどう見ていたのであろうか。「日本気象資料(2)」に西暦640年ごろから1868年（明治元年）までの約100例の虹の観察記録が残されている。これによると「白虹」の数が結構多く、あとは5色ないし6色の虹である。江戸時代の「和漢三才図会」では3色、アリストテレスも虹は3色としている。時代によって、観察する

人間は虹の色をどう見ていたのであろうか。「日本気象資料(2)」に西暦640年ごろから1868年（明治元年）までの約100例の虹の観察記録が残されている。これによると「白虹」の数が結構多く、あとは5色ないし6色の虹である。江戸時代の「和漢三才図会」では3色、アリストテレスも虹は3色としている。時代によって、観察する

人によって色は変わるようである。

色は人の心によっても変化するようだ。「隣の花は赤い」と言うように他人の物はよく見えてしまう。とかく色眼鏡を掛けて物事を見てしまうが、出来れば真実の色を見きわめるようにしていきたい。「柳は緑花は紅」である。物事には、そのものにふさわしい特性があるからである。

虹を7色と言いだしたのはいつ頃からだろうか。1670年、ニュートンは太陽光は7色の光の混合であり、水の屈折率が光の色によって少しずつ違うことを明らかにして虹の色の説明をした。また、7色のそれぞれのスペクトルの長さは、音階のレ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ド、レに対応しているとした。どうやら、7色の虹はこの頃出来上がったようである。

日本で最初に7色の虹と云ったのは、江戸時代の物理学者、青地林宗である。彼の著書「気海観瀾」(1827年)によると、太陽光の色は7色であり、虹が現れるのは「太陽と雨足が相対して、光線が雨滴に屈折反射して、かつ三稜プリズムで諸色を生じると同じである。(中略)噴水もまた虹色を生じさせる」とある。この頃から日本でも7色の虹になったようだ。江戸時代以前の日本人にとっては、虹の色はたかだか6色に見えていたと言って良い。さて、実際のところ我々は何色と云えばよいのだろうか。



東京多摩国体スポーツ祭東京2013 ニュース

第68回国民体育大会

大会会期 平成25年9月28日～10月14日

○八王子での正式競技(6種目)

サッカー(女子)、体操(競技・新体操)、自転車(ロードレース)、軟式野球、ゴルフ、高校野球(硬式)

○デモンストラレーション競技(6種目)

インディアカ、グラウンド・ゴルフ、少林寺拳法、ターゲットバードゴルフ

興味のある方は、会場、開催期日をお問い合わせください。

国体八王子実行委員

岡部・立川会員

俳句同好会便り

河合 和郎

私の一句～8月の句会から

猛暑にも負けず全員参加。出句、選句、そして全員での鑑賞と大いに盛り上がった3時間半でした。今月の兼題は「星」。

寝ござ敷き夜風を入れてエコライフ 馬場征彦

まさにエコライフのお手本。寝莫塵に籐の枕、そして風鈴と揃えばあとは夜風が心地よい。

追伸に本音書き添へ夏終る 渋谷 文雄

本音を言わない昨今。しかし、必要な時には本音も言う勇気を。「追伸に」が大人の配慮。

人去りて夏草深し休耕田 石田 文彦

本日の一番句。農業の深刻な後継者不足。原発被災地の農業の崩壊。「人去りて」に全てが。

夏星座神の遊びし名残かな 池田ときえ

星座には神々の物語が伝わっている。星の舞台を見上げての一句。雄大なロマンの香りが。

秋あかねはや群れ飛びて畑の道 立川富美代

季節の移ろいをうまく詠んでいる。季節を一步先取りするのも俳人の感性。

紺ゆかた星に願ひを掛けし女 田中 信昭

風情がある。あれこれ想像をめぐらせて鑑賞。浴衣の女(ひと)は何を願ったのだろうか。

薫風や溪流釣りの水ひかる 飯田富美子

溪流釣りは難しい。山女や岩魚との根競べ。作者が女性とは意外。「水ひかる」がいい。

天帝も嫉くほどの仲夫婦星 東山 榮

牽牛と織女の仲を天の神も嫉妬していると星祭を詠む。夫婦仲の良さは作者自身のことでも。

星月夜友と語りし遠き日々 阿部 治子

満天の星空にふと友のあれこれを想う。もう帰れない日々。そんな思いのこもる秀句。

星一つ流れて里の闇深し 河合 和郎

山里の夜の闇は深い。流れ星もひとときわ鮮やかな尾を引いて流れる。今宵また一つ。

編集後記 :文章を削ったり増やしたり、写真の位置で行の増減をしたり、偶数ページに収めるのに苦労した。
矢崎安弘